

大津絵調査で 黒船館来訪

日仏会館からマルケ所長

江戸の民画「大津絵」の研究者として知られ、角川ソフィア文庫から著書「大津絵」を出版したばかりのフランス人、クリストフ・マルケ日仏会館フランス事務所長(51)が4日、市内青海川、コ

ン(1926年出版)に掲載された大津絵に「戯魚堂」の印鑑が押されていたことから、十数点を所蔵する黒船館の存在を知り、調査に訪れた。

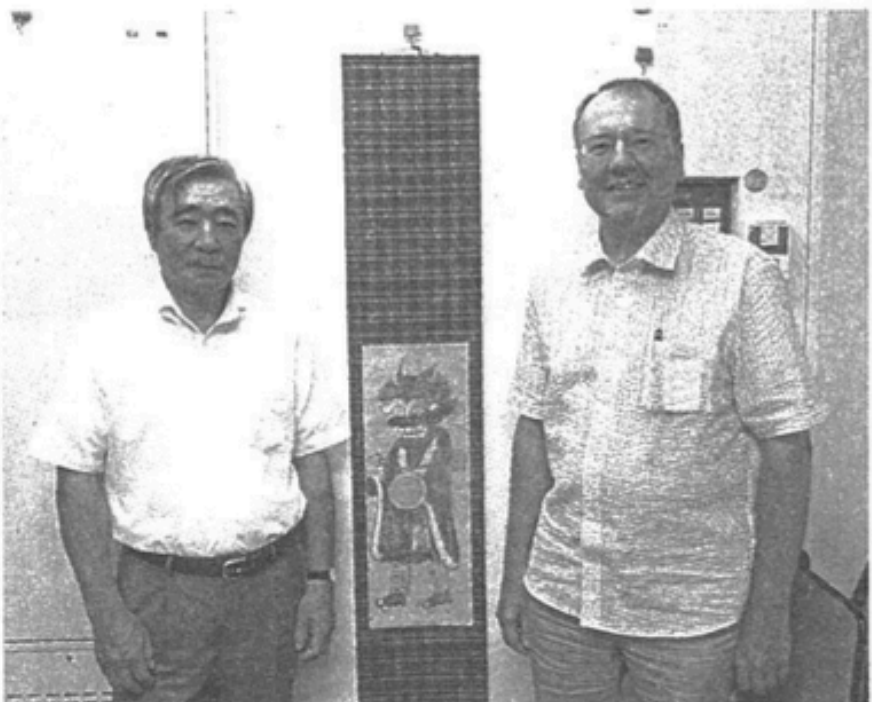
大津絵は江戸時代から明治にかけて約350年間に、東海道の土産品として流行。鬼が念仏を唱え、神々が相撲をとるなど奇想天外な世界を描いており、後の柳宗悦や梅原龍三郎、河鍋曉斎、ピカソなど多くの画家、文化人に影響を与えた。

マルケさんは約25年

同館の大津絵の前に、マルケさんは「大津や東京などに大津絵が200点余りあるのは分かってはいるが、全国に現在どのくらいの数があるのかは全く分かっていない」と話した。今は大津絵のデータベースを構築するため、情報を求めて全国を旅している最中という。

前、東大留学時代に大津絵に関心をもち、昨年には長年の研究成果をフランス語の著書にまとめた。この日本語版として、先月出版した文庫本は好評で、すでに重版も決まっている。今回の来柏は、美術雑誌「デザイ

吉田理事長は所蔵品の多くが祖父・吉田正太郎さん(故人)が収集したものだと言い、「多くは全国の人と手紙などで交流を重ねて手に入れたもの。黒船館の存在価値はその交流の深さと広さにある」と説明した。



黒船館所蔵の大津絵を前にクリストフ・マルケ日仏会館フランス事務所長(右)と吉田理事長

文人との交流に価値